

滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト “SANPOh”
令和4年度第3回焚き火ミーティング
「障害の有無にかかわらず、誰もが参加できる文化芸術のあり方」

日時:令和4年11月16日(水)19:00-21:00

場所:オンライン

参加者:10名(うち、関係者5名)

「障害の有無に関わらず誰もが参加できる文化芸術のあり方」について

県内では、公演に手話通訳や音声ガイド、字幕をつける、触れる作品を展示するなど、障害の特性に配慮した多様な文化芸術活動の取組が行われています。

このような取組が今後より充実していくために、参加者同士が取り組んでいる活動や見聞きした活動について、感じたことや考えたことを話し合いました。

○参加者の主な意見

- ・以前、俳優であり介護福祉士でもある菅原直樹さんのワークショップに携わった。菅原さんは介護現場での発見をもとに、介護と演劇の相性の良さを提唱して、ワークショップ活動を続けている。会話がかみ合わないような認知症の方と接する時に、演技を取り入れ、認知症の方が話すことを受け入れ会話を続けると、コミュニケーションが上手くいくことがあるそう。世の中に演劇や芸術などに興味がないと思っている人でも、演劇が認知症ケアに活かせるということを知れば、「演劇もいいかも」と思ってもらえるかもしれない。このように演劇(芸術)の新たな価値を見つけられることは有意義なことではないだろうか。
- ・「誰もが参加できるプログラム」というと、対象が漠然としているように感じる。そのため、まず、対象となる人に出会うことが重要だと思う。関わり合いの中で、その人の生きづらさや障害に対して、「何か工夫できることはないか」、「どうしたら文化芸術に参加し楽しんでもらえるのか」と考える視点が大事だと思う。
- ・資金面で苦勞している芸術家がたくさんいることをきっかけに、芸術家の支援をしている。アートをやっている人の中には様々な個性を持った人がいるが、その人に障害があっても、障害を意識して付き合ってきたことはない。1人1人と向き合いながら、うまく付き合っていくヒントを探している感じがする。
- ・助ける側、助けられる側という関係が固定することなく、役割がうまく入れ替わるような仕組みを作りたいと思う。障害のある人でも助ける側になったり、ずっと助ける側の人の方が疲れた時に、別の人がフォローするような、循環の仕組みが作れないだろうか。

- ・劇場は、地域にどんな人がいるのかを認識できる場だと思う。劇場が、誰にでもアクセスできる場所になることで、地域の人がお互いを知って受け入れられるようになると思う。
- ・妊娠中、生活に不便を沢山感じ、世の中を見る目が変わった。先日、赤ちゃん向けのパフォーマンス「ベイビーシアター」に親子で参加した。日々の暮らしでは「この子は私の子」という所有の意識が強く働くが、パフォーマンス中に子どもたちがその場を思い思いに歩いているのを見ると、自分の子も、他人の子も、更には他の保護者もパフォーマーも、その場にいる皆が一つのコミュニティを作っているような安心感を覚えた。劇場は、そのような場を作ることができるのだなと感じた。
- ・「迷惑をかけちゃいけない」ということを気にしなくてもよい公演は大事。「リラックスパフォーマンス」のように、色々な特性を持った人が来ることを歓迎する公演は、そのことを事前にしっかり説明しておくことがポイントになっている。事前に説明することで、何かイレギュラーなことがあっても、そういう状況をみんなで楽しもうという意識が芽生えてくる。作品としての大事な部分は保った上で、そこにいる人たちと即興的に場を作っていく演出方法は、多様な人を受け入れやすいのかもしれない。
- ・催し物がなくても市民が立ち寄る場所になっているような劇場が理想。近所の人々が暇な時に集まって話したり、学生が自習をしたり、子どもと散歩に行くような場所になると良い。劇場のボランティアも、業務が決まり固定化している場合があるが、ボランティアが自発的に活動できるような関係を劇場との間で育てると良い。
- ・さまざまな背景を持った人たちと一緒に生きることが実感できるような場所、コミュニティーの様子が感覚としてわかるような場所が、地域には必要。劇場がそのような場所になると良いが、上演することに特化している劇場の場合、難しい面もある。ロビーのような場所なら、上手く使うことができると良いと思う。
劇場等の文化施設に限らず、縁側のように来場しやすい既存の場所を探して、その場所を運営している人たちと一緒に、さまざまな文化芸術活動を展開していけると良いと思う。